

漆黒の剣の物語

ふあるこむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リ・エステイーズ王国の辺境の村で生まれ育った少年ペテル・モークは、十六歳の成人を迎えて故郷から離れることを決意する。冒険者になるべく向かう先は城塞都市エ・ランテル。彼はそこで仲間たちと出会い、数多^{あまた}の冒険を繰り広げることになるだろう。彼を突き動かすのは、十三英雄への憧れと、幼き日に抱^{いだ}いた淡い恋心――

これは、ペテルたち『漆黒の剣』が後に英雄と謳^{うた}われる戦士モモンと出会うまでの物語――

※途中まで連載していたものを再構成^{リメイク}してお届けします。

目次

第一章：結成前夜

第一話：ペテル・モーク

1

第二話：エドストレーム

9

第一章：結成前夜

第一話：ペテル・モーク

〔1〕

暗い森の中を一団の影が動いていた。丈高い樾の木が密生しているため陽の光は乏しいにも拘らず、彼らは苦もなく下生えを踏破していく。影の正体は、人間と蟊蛙の合いの子を戯画にしたような怪物——小鬼だ。

彼らは夜眼が利く。それは小鬼が捕食者、あるいは略奪者として運命づけられた種だからかもしれない。無論、まったく光源のない場所では何も見えないが、人間と比べて遥かに少ない光量で周囲を視認することができた。この程度の暗さは彼らにとって何ら障害にならない。しかし、強行軍でここまで来た反動からか、その足取りは重い。

この小鬼たちは森での生存競争に敗れた群れだった。罅を追い出された彼らは、活路を求めて歩を進める。人間の子供くらの身長の小鬼の中で、一際体格の優れた一体が怒りで顔を歪めた。

首領の彼は思う——あまりにも理不尽だ、と。

奪うことは当然でも、奪われることを当然だとは感じない。別に小鬼に限らず、略奪者とはそういうものだ。そして、死ぬまで奪い続ける。彼は奪う立場に復帰するためにどうすべきか考えた。

もはや生まれ故郷たるこのトブの大森林に居場所はない。不本意だが、平野を抜けて別の森に移動するしかないだろう。平野は人間という種族の領域とはいえ、奴らは何が楽しいのか土弄りばかりしていて、そのほとんどが戦うこともできない臆病者だ。一部に強い人間もいるが、大抵は用心棒に任せれば事足りる。

彼が後ろを振り返ると、小鬼とは比ぶべくもない巨軀の食人鬼が付き従っているのが見えた。三メートルに及ぼうかという身体を猫背にして、地面に付きそうなほどの長く逞しい腕の先、手にはゴツゴツとした棍棒を握りしめている。毛の抜けた大狸のような容貌だが、凶暴な顔つきは怪物そのものだ。

このように小鬼と食人鬼が共生関係になることは珍しくない。小鬼は怠惰な食人鬼に食料を提供し、食人鬼はその腕つぶしで小鬼の安全を保証する。上下関係は特になく、雇用者がよほど無茶を言わなければ被雇用者は従った。

彼が満足げに頷く頃には、周りの樹木も疎らになつていた。忌々しい日差しに眼を焼かれて舌打ちするが、しばらくは太陽の直下で行動することになる。今のうちに慣れるしかないだろう。

やがて灌木を抜けて視界が開けると、人間の集落が近くにあることがわかった。手始めにあの村を襲撃し、食料を奪つて英気を養うべきか、と彼が考えていたのも束の間、件の村から甲高い鐘の音が聞こえてきた。

——見つかった？ 反応が早すぎる。奴らは呑気に地面を耕し、不意を突かれて驚いた次の瞬間には息絶えているはずの連中だ。そんなことはありえない。

頭を振って気を落ち着かせた彼は、仲間たちに前進を命じた。しかし、近づくにつれて武装した人間が集まつてきているのを認め、先の懸念が勘違いでないことに気づかされる。村を囲むように設置された防護柵の後ろで待ち構える人間たちは、まるで訓練された兵士のようだ。

心配はいらない。いくら集まつところで、人間如き少し脅してやれば蜘蛛の子を散らすように逃げ出すだろう。それよりも問題なのは、同胞の進行の妨げになる柵だ。あれは用心棒に破壊させなければならぬ。

彼は食人鬼を先行させ、他の小鬼と共に少し遅れる形で村に接近した。食人鬼の姿を見た人間たちの間でどよめきが起こる。やはり烏合の衆、一押しすれば造作もない。彼が口角を上げたのと、かけ声とともに弓矢が射られたのは同時だった。一斉に飛来した矢の内の何本かが食人鬼に突き刺さり、巨体が苦痛に呻いて歩みを止める。

弓矢！ 彼に初めて衝撃が走った。訓練された者でなければ使いこなせる武器ではない。それが何人もいる。撤退すべきか？ いや、どこに逃げるといふのだ。生き残るためには、ここで勝利して食料と

休息を得る他に道がないではないか。

突つ立つていても良い的まとにしかならないと、彼は突撃を敢行した。矢を掻かい潜くぐつた仲間たちが柵に取り付きよじ登ろうとするが、隙間から突き出された槍に臟腑ぞうふを抉えくられ、次々と屠ほぶられていく。こんなはずでは——、頭を真つ白しろにしている彼の耳に、人間の怒鳴り声が届いた。「ペテル、無茶をするな！ 戻つてこい！」

彼には確かにそう聞こえた。言語体系のまったく異なる人間の言葉を理解したのだ。だが、彼に驚きはない。この世界では当たり前のことだから。かつてこの世に降臨した神の石柱は、この現象を『翻譯コンニャク』と呼んだが、神を信じぬ小鬼ゴブリンの彼には知る由よしもない。

見れば、一人の人間が柵を乗り越えて彼の前に立っていた。事ここに至つては是非ぜひもなし、この人間の雄オスを道連れにして自らの矜持きやうじとしよう。

小鬼ゴブリンにしては珍しく武人氣質の彼が得物えものを構える。無造作むぞうさに近づいてくる愚かな人間に嘲笑ちやうしやうを浮かべ、両手で持った壺刀を振り抜いた。相手は上質な革鎧に身を包んでいるが、例え切り裂くことはできなくとも、打撃力で骨と内臓を粉碎することは間違いない。しかし——

「要塞あいたい——！」

相対する人間がそう叫ぶと、渾身こんしんの力で叩きつけたはずの壺刀が硬質な音を立てて跳ね返かえった。彼は何が起きたかわからず、体勢を崩してたたらを踏む。刹那せつな、裂帛れつぱくの気合を込めた雄叫おたけびが聞こえたかと思うと、そこで意識が途絶とだえた。

【2】

「馬鹿者！ なぜ柵を越えて突つ込んだ！」

雷鳴のような声が轟とどろき、拳を叩きつけられた卓テーブルが大きく揺れた。声の主——ギグ・モークは、鍛え上げられた鋼のような身体からだをわなわなと震わせ、眼の前まへにいる自分の息子を睨にらみつける。その突き刺すような視線しせんに晒さらされながらも、ペテルは臆おそすることなく溜め息いきを吐いた。

「食人鬼は狩猟組の母さんやカノンさんたちの弓矢で倒せそうでしたし、他の小鬼は自警団のギランさんとルッチさんを中心とした槍衾の餌食になっていました。首領らしき小鬼が逃げ出しては困ると思っただけです」

「口だけは達者になったな!」

「私も十六歳の成人を迎えたんですから、一人の戦士として扱ってください。武技も使えるようになったじゃないですか」

ギグは眉を顰め、まじまじとペテルを見つめた。金髪碧眼、これといった特徴もない容貌だが、比較的整った穏やかな顔立ちはどちらかというと母親のレイラ似だ。

それでいて、父親のギグの才能を受け継いだ戦士としての技量は父に迫るほどであり、既に武技——戦士が使う魔法とも呼ばれる不思議な力を持った技も習得していた。ペテルが使用できる〈要塞〉は、短い時間ではあるものの自分自身や装備の強度を飛躍的に高めることが可能だ。

客観的に見て、この村では自警団の団長であるギグの次に強いのがペテルであることは間違いないだろう。だが、それゆえの慢心が先の行動や無鉄砲な決意につながったとギグは考えていた。

「それで……、本当に明日出ていく気か」

ぼそりと呟かれたギグの言葉は、確認というより諦観を伴う独白に近い。何度も翻意を促したが、ペテルの固い決心が揺らぐことはなかった。こんなことなら、幼い息子に成人になるまで我慢しろなどと言うべきではなかった、と今更ながらギグは後悔する。

ペテルは子供の頃からの夢——冒険者になるために故郷の村を離れるつもりだった。随分前から宣言されていたことなので、村の住民に驚く者はもはやいない。今回の怪物の襲撃騒ぎで延期になる可能性もあつたが、幸いにも被害は軽微なため、わざわざ計画を変更するまでもなかった。

「はい、予定どおりエ・ランテルに向けて出立しようと思います。村長に挨拶しておきたいので、これで失礼します」

ペテルはそう言い残し、「まだ話は終わっていないぞー!」と呼び止め

るギグを無視して自宅を出た。今まで何度も繰り返されたやりとりで時間を潰す気は毛頭ない。

彼とて、冒険者になることを両親が快く思わないのは理解できる。冒険者は明日の命をも知れぬ危険な職業、諸手を挙げて賛成する親なぞどこにしようか。それでも、ペテルにはその反対を押し切るだけの熱意があった。その源泉は、これから向かう村長宅にある。

【3】

ここザリア村は、リ・エステイーゼ王国のレエブン侯領にある開拓村の一つだ。今の村長が旗振り役となつて入植したのが約二十年前、まだ成立したばかりの新しい村落と言える。それでも、村人の努力で今や百世帯ほどが生活する規模にまで発展していた。

村は主穀——納税用の小麦や主食となるライ麦等——の収穫を終えたばかりで、落ち穂拾い、脱穀、干し草作りに忙しい。男はもちろん、女子供も駆り出しての過酷な作業だ。しかし、王国の他の農村に比べて恵まれているのは、男手がきちんと確保されている点だろう。毎年、隣国のバハルス帝国が収穫期になると軍を動かすため、多くの村は徴兵で働き盛りの男性を失う。専業兵士で構成される帝国とは異なり、徴兵制の王国にとつてこの時期の戦争は生産力に直結する。ここ数年それが繰り返された結果、収穫量の低下により廃村に追い込まれたところも少なくないという。

幸いなことにザリア村は徴兵を免れていた。レエブン侯がトブの大森林に接する領内の開拓村に兵役の免除を特権として付与しているからだ。

通常、開拓村は森を伐採して地味豊かな腐葉土を耕地とする目的で作られる。だが、怪物が跳梁跋扈するトブの大森林を開拓するのはあまりにも危険であり、むしろ侯は開拓村に防波堤としての役割を期待した。それゆえ、兵役を免除する代わりに独力で防衛を求めたのだ。

村の構造にもそれが反映されていた。中心地から環状に耕地が広がるのではなく、怪物の襲撃に備えて森側に防衛施設等が集中し、

後背の耕地を守る形になっている。

無論、普段から人里近い矮林に怪物が出没するわけではない。村人が資材を求めて木を伐採するし、豚を放牧して団栗を食べさせもする。たまにその内の数匹が攫われることはあるが、必要経費として割り切っていた。

恐ろしいのは森の中で縄張り争いに敗れて集団で移動してきた怪物で、彼らは失うものがないため、森の外にも平気で姿を現し、人間の村を略奪しようとする。ザリア村が半農半兵の体制を敷いているのも、そうした群れが攻めてきたときに総出で対応することを想定してのものだった。

いざ戦闘となれば、防衛の中心となるのは自警団だ。彼らは平時も専ら村人の訓練指導や警邏を務めとしており、生産活動には従事しない。ギグの息子であるペテルも同様の扱いを受けているので、冒険者になるための鍛錬や勉強に多くの時間を費やすことができた。

恵まれた環境で育った、とペテルは思う。それもこれも両親のおかげだが、恩を仇で返す形になってしまったことが、彼の表情を曇らせた。

上の空で村長宅の前まで来たペテルの側を、子供たちが木の枝を武器に見立て、チャンバラをしながら無邪気に駆け抜けていく。かつての自分を思い出し、微笑を浮かべてそれを見送ると、眼の前の扉を叩いた。

しばらくして戸口に顔を出した夫人によると、村長は怪物との戦闘で傷を負った村人を見舞っている最中だという。ペテルはひとまらずに通してもらい、その帰りを待つことにする。

村長宅を訪れるのは彼にとって珍しいことではない。文字の読み書きを教えてもらうために幼少の頃より頻繁に通っていたからだ。最初は村に唯一存在する本——十三英雄の物語を読みたいという子供心から始まった手習いは、途中から冒険者になるうえで必要だからという、より現実的な要求で行われるようになった。

かつて村の危機を救った冒険者の一行、『守護の聖剣』の構成員であるロックマイアーが、文字の読み書きの重要性を教えてくれたのが

きつかけだ。それ以来、ペテルは村で最も勉強熱心な人間と言われてきたが、それももうすぐ過去の話になるだろう。

手持ち無沙汰のペテルは、棚に置かれた十三英雄の本を取り出した。何度も繰り返し手に取られたその本は、ところどころ破けていたり、汚れて読みにくくなつた箇所が見受けられる。それでも、彼は欠損部分の文章を諳^{そら}んじるほどに読み込んでいたため、別に支障を感じることはない。

二百年ほど前にこの世を恐怖に陥^{おとし}れた魔神に立ち向かい、世界を救った英雄たち。その中でも中心となつた人物は、最初こそ脆弱^{ぜいじやく}だったものの、成長することで最終的には他の誰よりも強くなつたと伝わっている。ペテルはその英雄に自分を重ね合わせ、いつか自分も英雄になる日を夢見た。それは今も変わることなく、彼を冒険者の道へと誘^{いざな}っている。そしてもう一つ――

「ペ、ペテルくん、ここにいたんだね」

感傷に浸^{ひた}るペテルの背に不意に声がかげられ、振り返ると、彼の幼^{おきな}馴染^{なじみ}であるモーゼが後ろに立っていた。小太りの身体^{からだ}を揺らしながら、いつものおどおどした様子でペテルに近づいてくる。

「モーゼ、何か用かい？」

「べ、別に用はないんだけど……、ペテルくんと話せるのも今日が最後だな、と思つて。ギグさんから居場所を聞いて会いに来たんだ」

モーゼが気恥ずかしげに頭を掻^かいた。それから、ペテルが持っている本に気づき、懐かしそうに頬^{ほお}を緩める。

「わあ、十三英雄の物語か。昔よく村長にせがんで読んでもらつたなあ。あの子のことは憶^{おぼ}えてる？ 数日だけど、女の子がこの村に滞在して、三人で一緒に十三英雄の話聞いたことがあつたよね。今はどこで何をしてるのかな」

その言葉にペテルは眼を伏せた。忘れるはずがない。未だに彼の脳裏^{のうり}に焼き付いている少女の面影^{おもかげ}、淡い恋心を抱^{いだ}いた甘酸^{あま}っぱい僅^{わず}かな思い出の日々。身寄りのない彼女とその母親は、余裕がなかった当時のザリア村に受け入れられることもなく、何処^{いずこ}かへ消えた。彼女ともう一度会いたい――それが、ペテルが冒険者になりたいと願つたも

う一つの理由だった。

「そうだね、どうしているのかな」

ペテルは遠くを見るような眼差^{まなざ}しで反芻^{はんすう}する。

「エド——君は今どこで何をしているんだ？」

第二話：エドストレーム

【一】

リ・エステイーゼ王国の王都に夜の帳が下りていた。辣腕を振るう皇帝により区画整理されたバハルス帝国の帝都とは異なり、猥雑な古色蒼然とした街並みは深い闇をも包含する。人々は自らがその毒牙にかからぬよう眼を背けているが、それが緩慢な滅びへの道だとは気づいていない。

八本指——王国を蝕む巨大な犯罪組織はそう呼ばれていた。奴隷売買、暗殺、密輸、窃盗、麻薬取引、警備、金融、賭博の八つの分野が緩やかな連携を取る組織連合だ。その呼称は、四大神の石柱たる土神の従属神、『盗みの神』の指が八本であることに因んだものとされる。

彼らは貴族や官憲と深く癒着しており、告発しても証拠を揉み消される可能性が高い。よしんば司法から有罪を引き出しても、幹部級は保釈金で解放されるのが関の山だった。それゆえ、心ある者の多くがその存在を知らながら、容易には手を出せずにいる。

その八本指の警備部門本部が王都の一角にあつた。警備部門は他の部門への用心棒の派遣を生業とする。無論、各部門にも腕の立つ者はいるが、この世界には多少強い程度では太刀打ちできない猛者が存在した。そうした手合いを相手取るときに声がかかる少数精鋭の実力者集団。中でも飛び抜けた強さを誇る二名は『両腕』と称され、裏の業界の者に恐れられていた。

だが、それも今日で終わるかもしれない。これから行われる試験の結果次第で、腕が一本増えて『両腕』は『三腕』になるのだから。

「エドストレーム、準備はいいか？」

禿頭の大男の言葉に応え、女性が黙って頷いた。敷地内の中庭に設けられた訓練用の広場で、篝火が彼女にゆらゆらと陰影を投げかけている。

照らし出されるその姿は、流れるような銀髪を後ろでまとめ、切れ長の眼元も涼しげなやや面長の美貌。薄衣を纏い、惜しげなく晒され

た褐色の柔肌は瑞々しく、二十歳にも満たぬ若さながら、艶然とした
雰囲気かもしだを醸し出すその様は、男に劣情を抱かせるに十分だ。しかし、
腰に佩いた6本の三日月刀シミタがそれを拒絶する。

エドストレームと呼ばれた女の他にその場にいるのは、彼女に声を
かけた巖いわのような男と、貴族が夜会で着るような煌びやかな衣装に身
を包んだ優男やさおとしのみ。そして、この二人の男こそが泣く子も黙る『両
腕』だった。

警備部門の長おぎにして、王国最強の戦士ガゼフ・ストロノーフにも匹
敵すると言われる修行僧モンク、『闘鬼』ゼロ。かすり傷さえ致命傷となる魔
劍ローズ・ソーンの薔薇の刺を得物えものとし、神速の突きを放つ決闘士デュエリスト、『千殺』マルム
ヴィスト。新たな『腕』の候補たるエドストレームに相対するのは、正
統派剣士のマルムヴィストの方だ。

「試験は真剣で行う。とはいえ、相手を殺すのは御法度だ。過失で死
なせるような間抜けも『腕』を名乗ることは許さん。マルムヴィスト、
お前も例外ではないぞ」

「わかつてるよ、頭目ボス。そのために普通の刺突剣レイピアを持ってきたんだ」
マルムヴィストは護ナックルガード 拳に通した指を支点とし、器用に剣を回転
させた。愛剣ローズ・ソーンの薔薇の刺でないのは、当たれば致死性の凶悪な武器を
使うわけにはいかないからだ。

「エドストレーム、あんたはもちろん魔法付与された武器を使って構
わない。そうでないと意味がないからな。だろ？ 『踊る三日月刀』」
エドストレームは返事をする代わりに得物えものを抜き放ち、前方ほうに放り
投げる。腕に通した金属の輪がしやらんと鳴り、それに応えるように
三日月刀シミタが空中で止まった。〈舞踊〉が魔法付与された武器を自由自
在に動かし、敵を翻弄する——彼女の二つ名の由縁だ。

「始めろ」

ゼロの宣言に従い、エドストレームが剣の一本を一直線に射出し
た。マルムヴィストは難なくそれを打ち払い、計五本の三日月刀シミタを浮
遊させた女を睨みつける。この程度の操作は誰にでもできることで、
彼女にとっては小手調べとも言える初撃だろう。優男からすれば、例
え挑発だとしても、その上から見下すような態度が気に食わない。

マルムヴィストは刺突剣を構えてゆつくりと前進した。一気に間合いを詰めることも可能だが、それではまるで自分が格下のようだ。少しずつ相手を追い詰め、止めを刺すのが強者の正しい在り方。そう彼は自分に言い聞かせ、優雅な足取りでエドストレームに近づいていく。彼女は動かず、三本の剣を前後から斬りかからせた。

先の直線的な軌道とは異なる変幻自在の剣捌きに、マルムヴィストは舌を巻く。しかも、それが同時に三本。手練の剣士三人を相手にしているに等しく、あまつさえ反撃もできぬ状況では、防戦一方とならざるを得ない。

これこそがエドストレームの真骨頂だ。類い稀な空間把握能力と並列思考により、普通の者であれば持て余す〈舞踊〉の武器を、五本まで己が手中にあるが如く操ることができる。もはやその脳力は生まれながらの異能と言っても差し支えない段階にまで達していた。

堪らず後退したマルムヴィストは、それまでの認識を改める。相手はまだ自身が手に持つものを含め、三本の三日月刀を余力として残している。わざわざ剣の結界の中を悠長に進むのは愚策としか言いようがない。接近戦に活路を見出す他ない彼にとって、やはり最大瞬間速度で肉薄することこそ取るべき道だった。

――〈超回避〉、〈能力向上〉、〈能力超向上〉――
重ね合わせた武技により、マルムヴィストの身体から湯気のようなものが立ち昇る。人類の切り札とされるアダマナイト級冒険者に比肩する『両腕』が一人、『千殺』の姿がそこにあつた。

――〈能力向上〉、〈知覚強化〉、〈可能性知覚〉――
対するエドストレームも武技を発動する。瞬きもせず観察するゼ口は、両者から放たれる異様な威圧感に動ずることもなく、次の瞬間には勝負が決まるだろう、と冷静に判断していた。

嵐の前の静けさを破り、マルムヴィストが大地を蹴る。視認不能の速度で駆け抜けているはずの男を、エドストレームは眼で追うことができた。四本の三日月刀を用いて獲物を網の目に捉えようとする。しかし――

「〈流水加速〉！」

更に速度を増したマルムヴィストが包囲網を脱した。一気に詰め寄り、自らが最も得意とする全身全霊の刺突を放つ。

「〈穿撃〉！」

武技が上乘せされたそれは正に神速の突き。狙うはエドストレームの肩口だ。例え防御系の武技を用いても、素肌の彼女では焼け石に水だろう。武器で捌こうにも、今からでは間に合わない。そう、あらかじめわかっているなければ。

「〈要塞〉」

強度を上げた三日月刀が横から寸分違わぬ精度で刺突剣を弾いた。マルムヴィストは舌打ちして得物を引き戻すが、首元に刃が当てられているのに気づき、おとなしく剣を手から離す。

この戦いで、エドストレームが初めて自分の身体を動かした瞬間だった。

「無様な、マルムヴィスト」

ゼロが腕を組んだまま不動の姿勢で嘲りの言葉を吐く。だが、その内容に反して負の感情は込もっていない。勝利の女神がどちらに微笑んでもおかしくなかったことを彼は知っているからだ。

傍から見ればエドストレームの圧勝に見えたかもしれないが、最後の攻防は〈可能性知覚〉によって辛うじて防いだもの。一撃通ればマルムヴィストが彼女を降していただろう。

「勘弁してくれよ、頭目。この女とは相性最悪なんだ。逆に、こいつが苦手とする相手を俺が楽に倒せる場合もあるだろうね」

「それはそうだ。エドストレーム、お前の戦い方は魔法詠唱者の範囲攻撃や、三日月刀を物ともしない重戦士には弱い。対策を考えておけ」

そう言い残して立ち去ろうとするゼロの背中に、エドストレームが慌てて声をかける。

「それで、合否はどうなの？」

「馬鹿を言うな、合格に決まっている。今日からお前は『三腕』の一人だ」

警備部門本部は石造りの無骨な建物だ。所属する者たちの個室を除けば、食堂や共同浴場といった必要な施設しか存在せず、娯楽の類は一切ない。それは修行僧であるゼロの性格を反映したもので、浮ついたものは徹底的に排除されていた。彼らの質実な共同生活は、ある意味において修道院と比較され得るかもしれない。

裏の世界で巨万の富を稼ぎ出す犯罪者集団にしては、あまりに慎ましい。しかし、武器庫に所蔵される魔法道具を見る者が見れば、眼が飛び出るほどの財産を有していることがわかるだろう。彼らの金の使い道はそういうところにあった。

当然、エドストレームが以前より等級の高い部屋を割り当てられたといっても、多少広くなっただけで、豪華な調度が置かれているわけでもない。彼女はあまり多くもない私物を荷物袋に入れ、引越し作業を行っていた。

大方の荷物を運び終わったエドストレームは、寝台に身を投げ出して仰向けになる。ぼんやりと天井を見つめ、しばらくしてから身を起こした。脇机に眼をやり、置いてある本を手にとって愛おしそうに表紙を撫でる。彼女は字を読むことはできないが、日に一度はパラパラと本を捲るのが日課になっている。

この本に物質的な意味で執着はない。だが、この本に書かれている十三英雄の物語は、彼女にとって片時も忘れぬ大切な人との思い出を彩る背景だった。彼の面影が色褪せるのを恐れるように、本を手を過去へと想いを馳せる。

エドストレームは娼婦の娘だ。当然、父親はどここの誰とも知れない。彼女が子供の頃、娼婦としての暮らしに嫌気が差した母に連れられ、定住の地を求めて当て所ない放浪の旅に出たことがあった。どの村でも白い眼を向けられ、母と共に追い立てられた少女が次第に心を閉ざしていったのは致し方のないことだ。

そんなときにエドストレームは彼と出会った。屈託ない笑顔が浮かべ、彼女を誘ってくれた。昼も夜も一緒に過ごし、温もりを与えて

くれた。大人にせがんで英雄譚を聞かせてくれた。灰色の世界は後退し、視界が一挙に色鮮やかとなった。彼は彼女よりいくつか年下だったが、そんなことは気にせず犬のように甘えた。

だが、それも数日のことだ。世界は再び灰色に染まり、エドストレームは王都で生活するようになる。母は娼婦に戻り、やがて梅毒を患った。その看病のために働き始め、彼に捧げるつもりだった純潔は早々に散った。彼女はその日、彼との幸せな結婚生活というささやかな夢を打ち砕かれ、一晩中泣き続けた。母と同じ末路が待っているのかと思うと、絶望に打ちひしがれた。

不幸中の幸いと言うべきか、人として壊れる前に才能を見出されたエドストレームは、最低の境遇から抜け出すことに成功する。自分を救ってくれた男——ゼロから、彼女の意思で思うがままに動く不思議な剣を与えられ、戦いの手ほどきを受けた。厳しい訓練だったが、他人の玩具にされるのではなく、他人を玩具にすることは、彼女に昏い喜びを覚えさせた。いつしか、彼女は周囲から『踊る三日月刀』と呼ばれ、凄腕の剣士として恐れられるようになった。

母が亡くなったとき、エドストレームは王都に自分を縛り付けるものがあるや何もないことに気づいた。すぐに思い浮かんだのは、かつての彼の優しい笑顔。居ても立ってもいられなくなった彼女は、書き置きも残さず王都を発ち、僅かな記憶を頼りに彼との思い出が詰まった村へ向かった。

何とか辿り着いた村では、彼が変わることなく両親と生活していた。遅くなったその姿がエドストレームの胸を締め付けた。すぐにでも彼に駆け寄りたかったが、汚れてしまった自分を見られるのが急に恐ろしくなり、結局は遠目に彼を確認しただけで村を後にした。

憔悴しきった表情で戻ってきたエドストレームを見て、ゼロは微笑かに笑った。お前の居場所はここしかないのだ、とその顔は語っていた。自分は彼に相応しくない。きっと彼も自分のことを忘れてしまっているだろう。せめて彼が幸せになってくれれば——

エドストレームはそこまで考えて我に返った。頬を伝って落ちた涙が、本の表紙に染みを作っている。毎日飽きもせずよくもまあ同じ

ことを繰り返すものだ、と自分が嫌になった。だが、それこそが彼の想いを、自らの生きる支えを失っていないことの証左だ。

彼女は本を置いて再び寝台ベッに横たわると、微笑を浮かべながらつぶやく。

「ペテルくん、元気になっているかしら？」